

鎌田茂雄博士の学的業績の総括

小島岱山(一峰院 住職)

1. 鎌田茂雄博士の華嚴学と禅学とにおける学的業績の総括

恩師鎌田茂雄博士は、筆者によって、その学問的業績のほとんどが凌駕され否定されてしまうということを生前、うすうすと感じていたようで晩年における先生と筆者の間は表面上の親しいつき合いとはうらはらに学問上の関係としてはずいぶんと疎遠なものとなっていた。師は若くして権威、ないしは権力(実際はみせかけの権威、権力にすぎなかったが)のある地位についたために、又、眼光するどく人を威圧するような独特の雰囲気もあったために、とうとう一生涯、師の学的業績については正しい評価が為されないままで終わってしまった。これは先生にとっても学界にとっても、さらには、他の学問分野において真理探究に生きる多くの人々にとっても、誠に不幸なことであったと言えよう。世間は権威、権力に大変に弱いものであることを如実に示した一つの事例ではなかろうか。しかしながら、筆者は、実在体得、真理体解、真実体現に生きる華嚴禅の行者であり、権威や権力などまるで眼中になく、むしろ俗人が賛仰し、ないしは、ひれ伏すこうした権威と権力をたたきつぶすことに快感さえ憶え、打ち倒さなければならないという使命感をも感ずるほどの心的状況にある。何となれば、学問とは一千年の定説を打破する存在のことを言うのだからである。一千年の定説を打破できないような研究は、学問とは言わず、お勉強と蔑まされよう。しかしながら、それはともかく、真実の学問のために、本当の華嚴学、正真正銘の中国仏教学の繁栄のために、恩師鎌田茂雄博士の学的業績について総括をしておかなければならないと言えよう。

なお、筆者は東京大学における鎌田茂雄博士の唯一人の直系の弟子であるので、こうしたことを行う資格は十二分にあると思っている。さらには、今回は総括ということであり、言葉の意味の違いとか論理の運び方の巧拙とかという如きの重箱の隅をつつくような枝葉末節の事柄には一切触れない。師の論文の基盤となっている最も重大な諸点についてのみ論ずる。

先ず、師の博士論文を本にした『中国華嚴思想史の研究』(東京大学出版会、昭和四十年三月初版発行)であるが、この論文は基本的なところで三つの大きな誤りを犯している。一つは、師は中国の唐代の華嚴思想史を宋代の淨源が信仰に基づいて捏造した五祖説に全面的に依存して理解しているという点である。もっともこの五祖説については盲目的な根強い支持が今もあり、唐代の華嚴思想史を学問的に厳密に研究したことがない初歩のレベルの研究者ほど信じ込み騙されやすい構造となっている。とりわけ、淨源が生きた宋代の華嚴学を専攻している者や法蔵の著作のみで中国華嚴学を勉強している研究者達にその傾向が強い。このような五祖説で唐代の中国華嚴思想史を理解し研究するとしたら、それこそいつまでたっても真実の、そして本当の学問的な中国華嚴思想史を構築することは到底不可能である。権威と権力を手中にしていた鎌田茂雄博士が、信仰に基づくこうしたバカげた華嚴思想史に基づいて博士論文を執筆し、しかも偽の権威で身を守ろうと東京大学出版会より上梓したことは、名状しがたい大いなる罪であると言えよう。東京大学出版会は、学問を基本的な部分で誤らせる、こうした鎌田茂雄氏の『中国華嚴思想史の研究』の出版は、即刻、取りやめにすべきである。

次に、二点目の大きな誤りは、法蔵の華嚴学が玄奘の唯識学に取って代わって則天武后によって当時の政治的かつ社会的イデオロギーの中心に据えられたという鎌田茂雄氏の学説である。この学説こそ鎌田茂雄氏の博士論文の根幹であり、最も大きな影響を多方面に及ぼした学説でもある。しかしながら、この学説もマッカなウソである。石井公成博士も述べているように、鎌田茂雄氏のこの学説を直接に証明する客観的な資料は全く存在しないし、逆に、筆者によって再発見された『八十卷華嚴經』の漢訳原典としての奉聖寺石幢群により、鎌田茂雄氏の学説を全面的に否定する資料が出現しているほど

だからである。鎌田茂雄氏の、このニセ学説はどのようにして生まれたのかと言えば、戦後間もなく鎌田茂雄氏が研究をはじめた頃、マルクス主義の歴史社会思想が流行していたために、それに影響され、或いは、それを利用して、このマルクス主義の歴史観、社会観を中唐における華嚴思想の変貌の研究に無理矢理当てはめたという、みじめな理由によっている。中国や韓国の学者で、特に仏教の研究者でない人々が、鎌田茂雄氏の、このニセ学説を真実と信じこんで、とりわけ権威や権力に弱い若い学者達が本ものと信じこんで、それぞれの分野での論文に利用しているが、全くの誤りであることを即刻、知らねばならない。鎌田茂雄氏の論文は、中唐における華嚴思想の変遷の歴史的意義を究明するのが目的の論文であるが、その論文の基礎が以上の如き有り様では、各種資料を並べたてて、いかめしい論文の体裁をとっているが、鎌田茂雄氏の博士論文は全くの噴飯ものの論文、典籍であると知られる。

三点目の大きな誤りは、華嚴思想と中国固有思想との比較研究において易の思想との対比を一切カットしてしまったという点である。鎌田茂雄氏の大きな業績は華嚴思想史の研究に中国固有思想、とりわけ、老莊思想と道教とを採り入れたところにある。しかしながら、華嚴思想そのものが、特に鎌田茂雄氏の、この論文の主たる研究対象人物である澄観の華嚴思想こそ易の思想が根本をかたち作っている華嚴思想なのである。これは老易一致を説いた李通玄の影響に依るものであり、澄観の華嚴思想の特質を明らかにしようとするにあたり、易の思想との対比を為さないなどというのは言語道断である。したがって、氏の論文は内容の片よった形ばかりの論文ということになり、学問研究の体裁を全く取っていない研究ということになる。

さて、次に鎌田茂雄氏が学士院賞を受賞した作品の『宗密教学の思想史的研究』(東京大学出版会、昭和五十年三月初版発行)についてであるが、この典籍が前書にも増して、とてつもない噴飯ものであるのは明らかであるが、研究者の中では、石井公成氏を除いては今までのところ筆者以外には、そのことを誰も気づいていない。鎌田茂雄氏も筆者の面と向かっての指摘により、さすがに恥じたものか、この著書については初版発行のみでやめている。どうして、この学士院賞をもらった典籍が全くの誤りのかたまりの論文集なのかとい

うと、その研究対象としての宗密という人物が中国仏教史上、最大の大ウソつき者だからである。すなわち、宗密教学の研究というタイトルでの論文ならば、何ら問題はないが、それを中国仏教思想史上に載せての研究となれば話は全く別である。それこそ、この典籍で思想史的に論ぜられている文章は、内容的にはすべて誤りの文章である。例えば、この論文の根本テーマのひとつとなっている教禪一致(この場合、教というのは華嚴思想を指す)の思想史についてであるが、鎌田茂雄氏は何らの検証の行為もなく宗密の主張を全面的に信じきって、教禪一致は宗密から始まったとしており、その立場からすべての論述が為されている：しかしながら、教禪一致の思想は李通玄から始まったのであり、李通玄は性空即方法、性無即大用の性起(この性起とは、無性の性を意味している)唯心頓悟の五台山系華嚴思想を大成させると共に、法界自性無作無相無心禪という五台山系禪思想も創始している。しかも、李通玄にあっては宗密の場合よりもはるかに深く、かつ強く華嚴と禪とが円融混然一体となっている。宗密は他の重要思想の場合(後に論ずるが)と同様に、李通玄の業績を黙殺し、自分が創始したものとして思想史上の大ウソをついたのである。

鎌田茂雄氏は駒沢大学の出身者のため、鎌田茂雄氏によって確立された宗密の大ウソについての学説は駒沢大学の禅学者達にさかんに採用された。教禪一致と言えば宗密、宗密と言えば教禪一致というくらいに駒沢大学の研究者達はこの宗密のニセの大ウソ教禪一致学説を、あたかも宗密から教禪一致の動きが始まったかのように誤解して使用している。田中良昭、石井修道、吉津宜英、各氏の禅思想史は、根本的なところで大きな誤りの禅思想史研究となっている。吉田剛氏(駒沢出身)の華嚴研究も宗密の学説を良く採用しているが、そのために、氏の華嚴研究は全く実体のない、幽霊華嚴研究結果となっている。

又、思想史上での大ウソをついた宗密は、儒仏道三教一致説においても大きなウソを『原人論』でついでおり、それを見抜けなかった鎌田茂雄氏は、「この原人論の思想は思想史的にきわめて重要な意義をもつ。第一には中国思想史のうえに、仏教の心識論を導入し、中国思想に主体的な心性を考究させる役割を果たしたことである。第二には仏教的立場の優越性を主張しながらも、

儒道二教それぞれの役割と位置づけを与えたことであり、後者は宗密以後の三教融合への足がかりを開いたものといえよう」(『宗密教学の思想史的研究』一六三～四頁)などと論じているが、儒仏道三教一致についても、すなわち思想内容的には、老莊易論孟仏一致の思想についても、老莊易論孟仏陰陽五行一致の思想を説いた李通玄から始まるのであって、思想史上、これ又、宗密は大ウソをついているということになり、鎌田茂雄氏の前掲のその文章全体、宗密の『原人論』に対してではなく、李通玄の『新華嚴経論』に当てはめるべき文章である。

その他、『宗密教学の思想史的研究』の誤りを指摘し出したらキリがなくなるが、もう一つだけ宗密の華嚴思想に関しての鎌田茂雄氏の大きな誤りを論じておこう。それは、この『宗密教学の思想史的研究』は華嚴思想と禪思想とを基調とする典籍となっているが、既に鎌田茂雄氏の華嚴思想史というのは五祖説に則った誤りの、少なくとも唐代の真実の華嚴思想史とは異なる机上の空論の華嚴思想史であるという点は指摘しておいたが、禪思想史についても、神会がウソを言い出し、宗密がそれにウをかけて大ウソにして宣伝した諸学説を、例えば、初期禅思想史を北宗禅と南宗禅とに分類して説明するとかというような、そのような立場を鎌田茂雄氏は基本的には何の疑問もなく採用しており、その結果、何度も言うように、宗密にすっかりダマされた禅思想史を構築してしまっている。以上の如く、鎌田茂雄氏の『宗密教学の思想史的研究』は、宗密の大ウソを見破ることが出来なかった、誤りの思想研究であり、権威を備えた鎌田茂雄氏がこのような研究論文を公けにし、しかも、このようなヒドイ内容の典籍で学士院賞をもらってしまったということは、誠に以て遺憾なことであり、中国禅思想史、中国華嚴思想史、ひいては、中国仏教思想史の全体を崩壊させ、誤りの中国禅思想史、誤りの中国華嚴思想史、誤りの中国仏教思想史を造り上げてしまったことは、誠に残念なことである。とり返しのつかない大罪を鎌田茂雄氏は犯したことになる。諸学者が早く気づくよう願うのみである。なお、駒沢大学の名誉のために言っておくが、例えば、石井公成氏(早稲田大学出身)などは、既に宗密の大ウソに気づいており、筆者と同様の路線で研究をしており、石井公成氏の禅学、華嚴学はまあまあまともなものである。「まとも」の内容とは、言うまでもなく、唐

代、宋代の史実に則った学問を行っているという意味である。ついでながら申し述べれば、公案禪に実際に参じたこともないのに、例えば、「一無位の真人」はプルシャだの、如来蔵だのと言っている松本史郎氏などは、禅思想を語る資格など全くない。自分の分をわきまえよ、恥を知れ。まさに言葉にひっかかり、言葉について回っている知解の徒をやっつけるために、例えば、「一無位の真人」という言葉があるのであって、松本史郎氏は、まんまとそれにひっかかってしまったというわけであり、「一無位の真人」の真の意味は、松本史郎氏が主張しているような意味とは全く異なり何の関係もない。松本史郎氏の解釈、理解は全くトンチンカンなものである。大きな誤りである。頭のさきで禅思想を語ってはいけない。公案禪に参じたこともない松本史郎氏は、とくに禅思想を論ずる資格も能力もない。即刻、禅思想の研究を止めるべきである。氏の禅思想の解釈のほとんどすべて、文字に執われたトンチンカンなものである。大きな迷惑であり、禅をダメにしている最悪の人間であることを松本史郎氏は知らねばならぬ。『臨濟録』のレベルになってくれば、参禅も『無門関』の例えば、無字の公案のレベルや、『碧巖録』のレベルとは、段ちがいに becoming。こういう経験なしに、禅思想や、禅哲学など語れるわけがなからう。「一無位の真人」の本当の意味を知りたければ、公案禪に参じてみよ。自分が今まで出版してきた本など、どこかへほうり出したくなるであろう。恥ずかしさのあまり。文字に基づく文字の解釈に依る禅思想など、禅思想でも何でもない。単なる知解であって、誤り、妄想のかたまりにすぎない。道元の『正法眼蔵』が、妄想というクソ、小便のかたまりにすぎないのと全く同じである。こういうことが本当に分かって、はじめて禅思想、禅哲学、いや禅そのものを語る資格が出てくるのであり、『正法眼蔵』の解釈などは、小説家ふぜい、随筆家ふぜいの文字に執着して妄想のかたまりで生きている人間どもに、或いは、説教師どもにまかせておけば良いのであって、実在の世界に生きる禅者が(本当の思想家、真実の哲学者)がやるべきことではない。

2. 鎌田茂雄博士の中国仏教史学における学的業績の総括

鎌田茂雄氏の中国仏教史研究は方法論的にも新しいものは何もなく、又、内容においても、従来の定説やらを寄せ集めただけであり、どうしてこのような典籍を国の税金を使って東大出版会が出版するのか誠にもって疑問である。氏は、これ又、国の税金を使って中国大陸へ行き、そこで集めた資料を、ただ机上で空論として作り上げられた中国仏教史に関する学説を、補強するためだけに使用し、真の学問的な活用を怠った。

ところで、それだけの批判するお前は中国仏教史全体をどう捉えるのだということになろう。何となれば、筆者が以下に示す中国仏教史通史こそ、鎌田茂雄氏の中国仏教史への具体的批判であり、氏の中国仏教史の限界を逆の意味において表すものであるからである。そして、筆者のこの中国仏教史こそ新しい中国仏教史の世界を提示するものである。

筆者は、中国仏教史全体を筆者が主張する仏教文化圏と系の二大概念に基づく東アジア仏教学の立場から捉えるものである。具体的な内容提示の前に、はじめに、東アジア仏教学の基準、すなわち李通玄によって大成された五台山系華嚴思想の観点から、東アジア仏教学の意義を中国仏教史を例に挙げて論じておこう。先ず、中国仏教の精髓と言ってよい五台山系華嚴思想が李通玄という居士仏教者によって大成されている点に注目しなければならない。中国仏教の一大特徴は、居士仏教者の活躍にある。東アジア仏教学とは、ひとつには、この居士仏教者の立場を強く前面に現し出す仏教学でもあり、こうした仏教学こそ、在家仏教としての大乗仏教の真実の在り方を明らかにするものではなからうか。

しかしながら、従来の中国仏教史は、この居士の仏教者の存在を全く無視した仏教史となっており、例えば鎌田茂雄氏の中国仏教史研究にあっては、居士仏教者による仏教史の意識はほとんどない。鎌田茂雄氏の中国仏教史研究は各種の高僧伝を下じきにしたものであって、誠に一面的であり、しかも、前述した如く、中国仏教の一大特徴としての居士仏教に対する配慮は皆無に等しい。勿論、塚本善隆氏、道端良秀氏も同様である。

中国仏教を本当の意味で支えた居士仏教者の仏教史が存在して、はじめて中国仏教史も十全なものとなる。東アジア仏教学に従えば居士仏教重視のこうした発想が自然に生まれてくる。東アジア仏教学の存在意義とその活用の一端を示せば以上の通りである。なお、居士仏教の立場からの中国仏教思想史ということであれば、儒仏道三教交渉史、或いは、中国固有思想と仏教思想との交渉史さらには疑經の研究を中心のテーマとする仏教思想史ということになる。ここで、居士仏教に基づく中国仏教史の概略を目次のかたちで述べておこう。なお、この居士仏教に基づく中国仏教史についてもいずれ詳細な研究結果を単行本として発表するつもりである。

中国新仏教史

序章 中国仏教史の区分と各時代の仏教の全体的特質

第1章 後漢(東漢)の仏教

- 第一節 楚王英の仏教信仰
- 第二節 桓帝と襄楷の仏教信奉
- 第三節 老子化胡説の成立
- 第四節 牟融の奉仏行為
- 第五節 漢訳仏典の成立

- 第一頁 安玄(安元)の訳經
- 第二頁 支婁迦讖(支讖)の訳經
- 第三頁 支曜・康孟詳の訳經

第六節 疑經の成立

第二章 魏・蜀・呉の仏教

- 第一節 魏の仏教
 - 第一頁 王弼・何晏と仏教思想
 - 第二頁 梵唄を創始した曹植と『弁道論』
 - 第三頁 老子化胡説の流布

第二節 蜀の仏教

- 第一頁 士大夫の仏教
- 第二頁 庶民の仏教

第三節 呉の仏教

- 第一頁 江南仏教の開拓者支恭明(支謙)の訳經
- 第二頁 呉の仏教思想界の二系統
- 第三頁 牟融の『牟子理惑論』

第三章 西晋の仏教

- 第一節 竺長舒・闕公則の誦經
- 第二節 衛士度・竺叔蘭の訳經
- 第三節 王浮の老子化胡經

第四章 五胡十六国の仏教—北方胡族諸王の仏教尊崇

- 第一節 石勒・石虎の仏教信仰
- 第二節 苻堅・姚興・慕容徳(・東晋孝武帝・北魏拓跋珪)の仏教崇拜
- 第三節 苻堅・習鑿齒の仏教信奉
- 第四節 格義仏教の唱導
- 第五節 苻堅・呂光・姚興の仏教崇敬

第五章 東晋の仏教

- 第一節 孫興公(孫綽)の『喻道論』
- 第二節 郗超の『奉法要』
- 第三節 謝慶緒(謝敷)の『注安般守意經』
- 第四節 羅含の『更生論』
- 第五節 廬山の浄土經
 - 第一頁 劉遺民の念仏三昧
 - 第二頁 張萊民・張秀実
 - 第三頁 王喬之の念仏三昧

- 第四頁 宗少文と白蓮社
 第五頁 戴安公の『釈疑論』と周道祖の『難釈疑論』
 第六頁 雷仲倫と白蓮社
 第六節 桓公の沙門敬王者論
- 第六章 南北朝の仏教
- 第一節 宋の仏教
- 第一頁 宋の武帝・文帝の仏教保護
 第二頁 謝靈運の『弁宗論』と『金剛般若経』への注釈
 第三頁 沮渠と『禅要秘密治病経』
 第四頁 何承天の『達性論』
 第五頁 宗炳の『明仏論』
 第六頁 顔延之の『釈達性論』
 第七頁 張融と『門律』
 第八頁 董吉と『首楞嚴経』の転読
 第九頁 何曇遠の浄土信仰
 第十頁 何彦恵とくの仏教信奉
 第十一頁 周彦倫(周顥)と『三宗論』
 第十二頁 劉義慶『世説新語』
- 第二節 齊の仏教
- 第一頁 文宣王蕭子良の八友と著作
 第二頁 范縝の神滅論
 第三頁 道士顧歡の『夷夏論』
 第四頁 傅大士と『心王銘』
 第五頁 荊山居士(陸法和)の仏業
 第六頁 劉蚪りゅうとうの『無量義経序』
 第七頁 明休烈の論争
 第八頁 謝鎮之の『与顧道士析夷夏論』
- 第三節 梁の仏教
- 第一頁 梁の武帝の仏教信奉

- 第二頁 昭明太子と『文選』
 第三頁 魏世子の『無重寿経』読誦
 第四頁 天台智者禅師の兄の陳参軍鍼
 第五頁 到茂灌の敬信仏法
 第六頁 裴幾原の持戒
 第七頁 劉勰りゅうけいの『文心雕竜』と『滅惑論』
 第八頁 劉士光と『革終論』
 第九頁 庾彦宝と六時礼懺
 第十頁 劉宣文と研精釈典
 第十一頁 江含潔と『無量寿経』
 第十二頁 劉士恒と『観音経』読誦
 第十三頁 沈約の仏教学
 一 神滅不神滅論争のまとめ
 二 沈約の伝記
 三 沈約の著作と思想
- 第四節 陳の仏教
- 第一頁 陳の武帝の奉仏行為
 第二頁 諸王の仏教信奉
 第三頁 傅宜事と『明道論』
- 第五節 北魏の仏教
- 第一頁 道武帝の仏教信仰
 第二頁 太武帝の仏教崇拜
 第三頁 太武帝・崔浩・寇謙之による廃仏
 第四頁 孝文帝の仏教敬崇
 第五頁 宣武帝の仏教尊崇
 第六頁 孝武帝と仏教衰退
 第七頁 楊銜之の『洛陽伽藍記』
 第八頁 劉謙之と『華嚴経』
 第九頁 李子約(李士謙)
 第十頁 張洪賑

第六節	北齊の仏教
第一頁	文宣帝の仏教興隆政策
第二頁	向居士と二祖慧可
第三頁	馮兗と恵光法師
第七節	北周の仏教
第一頁	北周武帝の仏教政策
第二頁	武帝と衛元嵩とによる廃仏
第三頁	宣帝の仏教復興
第四頁	張孝始と『薬師経』
第七章	疑經の成立と流布
第一節	西晋・東晋時代の疑經
第二節	北魏時代の疑經
第一頁	『提謂波利經』と信仰団体
第二頁	『宝車經』と泰山信仰
第三頁	『浄土三昧經』と戒法
第三節	宋時代の疑經
第四節	齊時代の疑經
第五節	梁時代の疑經
第六節	陳時代の疑經
第七節	道教と俗信に基づく疑經
第八節	特定の協議を標榜する疑經
第一頁	護国と菩薩の階位を説く疑經
第二頁	仏教改革、占察法、如来藏思想、速疾成仏思想を説く疑經
第三頁	観音信仰を説く疑經
第八章	居士の仏教信仰と仏教芸術
第一節	義邑について
第二節	法社について

第三節	齋会(布薩)について
第四節	弥勒信仰
第五節	文殊信仰
第六節	観音信仰
第七節	寺塔の建立
第八節	仏像の鑄造
第九節	諸石窟の造営
第九章	隋の仏教
第一節	文帝の仏教信仰と仏教政策
第二節	煬帝と仏教
第三節	三階教の歴史
第四節	三階教の教説
第五節	三教調和論のまとめ
第六節	顔之推と『顔氏家訓』

紙数の都合で隋代までで^{とど}めておくが、要するに、従来、教理史中心、学派史宗派史中心であった中国仏教史を、主伴を逆転させて、枝葉末節なものと見做されていた事柄を中心に構築し直したということであり、どちらの仏教史がより多くの人々が参画した仏教についての歴史を語っているかは論ずるまでもない。

追記：金知見博士には本当にお世話になりました。何のお返しも出来ないうちに永遠の別れということになり、残念な限りです。筆者が達磨の碑文と達磨の墓塔、達磨の塔所寺院の価値の再発見をした時には、大変に喜んで下さいました。それが今となっては良き思い出であり、心のなぐさめでもあります。先生とは専門分野がほぼ一致しますので、いつの日か御恩返しができたらと思う次第です。御冥福をお祈り申し上げます。